

御挨拶

中村歌舞右衛門

皆様、本日はお暑い中をご来場下さりまして誠に有難うございます。

「葉月会」も今年は第八回を開催いたす事となりました。中堅、若手俳優の技芸発表の場であり、歌舞伎邦楽若手の勉強発表の場としても、益々盛んになって参りましてこんな喜ばしいことはありません。是もひとえに皆様方の温かいご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

今年は河竹黙阿弥作の「切られお富」を発表いたします。昨夏の「志渡寺」をはじめ、どちらかと申しますと、義太夫狂言の稽古が続いてまいりました。このへんで江戸世話物の上演もよろしいのではないかと「切られお富」を稽古いたします。大喜利に清元の道行も発表するなど、多くの諸先輩のご指導いかばかりかと、深く感謝申し上げる次第です。

邦楽の勉強は、舞踊二題をご覧いただきたく存じます。

いずれにいたしましても、未熟者ぞろいでございますが、稽古熱心にめんじてどうぞ成果をみてやつて下さいますようお願い申し上げます。

尚、毎夏の開催にあたり、惜し身なくお力添え下さいますが、稽古熱心にめんじてどうぞ成果をみてやつて下さいますようお願い申し上げます。

平成元年八月

(伝統歌舞伎保存会会長)

第八回 葉月会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優 歌舞伎邦楽若手 研究発表会

竹本連中

長唄囃子連中

演技指導
第十期歌舞伎俳優研修生

○

藤間勘五郎||振付
尾上菊之丞||指導
二人 梶久

河竹黙阿弥一作

切られお富

二幕四場

序幕 薩埵峠一つ家の場

二幕目 赤間屋店 先の場

同 奥座敷の場
狐ヶ崎畜生塚の場

大喜利 「稚色於富與三郎」 清元連中
道行淨瑠璃 藤間勘十郎||振付

平成元年八月八日(火)

昼の部 十二時 開演
夜の部 五時 開演

後援
国法社團
主催
立伝統歌舞伎保存会
劇場

藤間勘五郎＝振付

道行詞甘替

できます。

淨るり

舍人 桜丸 幸右衛門
斎世の君 富二朗

莉屋姫 歌 次

淨瑠璃 竹本葵太夫

竹本幹太夫
竹本東太夫

三味線 鶴澤正一郎

鶴澤寿治郎
鶴澤泰二郎

桜丸 サア〜、子供衆買うたり〜と、売り声も高らかに、ひとりの飴屋がゆきます。これこそ、斎世親王の舍人桜丸。加茂堤ではぐれた親王と莉屋姫の行方を追つて飴売りに身をやつし、ようよう二人にめぐり逢うことが

舞台は、津の国、安井の里です。菅丞相の息女莉屋姫、帝の一子斎世親王の二人は、ここからさらに河内の土師の里へ向かいます。姫の実母にあたる覚寿の住む里です。桜丸の心づかいに感謝しながらも、はかなき身を嘆きかなしむ二人、送りとどける桜丸との三人の旅の姿を日本芸能の伝統である「道行」に仕立てて舞踊化した名作であります。

昭和41年11月、国立劇場開場記念公演「菅原伝授手習鑑」の二幕目として上演されたものを、今回、藤間勘五郎師の新たな振付をえて、桜丸に幸右衛門が出演、富二朗・歌次の若手が勉強いたしました。

尾上菊之丞＝指導
二 人 梶 久
長唄囃子連中
梶屋久兵衛 梅之助

松山太夫 梅之丞

しばらくは、この大曲の有名な歌詞をご鑑賞下さい。

「干さぬ涙のしつぼりと 身に染み染みと可愛ゆきの それが嵩じた物狂 とても濡れたるや 身なりやこそ 親の意見もわざくれと とかく耳には入相の 鐘に合図の廊へ行こやれ行こやれ……。

「行く水に うつればかわる飛鳥川流れの廓にきのうまで……。古風にして鮮麗な全歌詞をご紹介できないのは残念です。どうぞこれをご縁に後日「二人梶久」の歌詞をお楽しみ下さい。

二人梶久と申しますのも、傾城松山が梶久の姿を模し、「双面」ふうに連れ所作をしたところから名づけられたものです。今日にのこる作曲は初代錦屋金蔵という人で、安永二年市村座の上演と伝えられています。作詞者は伝えられておりません。当時は所作事「其面影二人梶久」として上演され、九代目市村羽左衛門、三代目瀬川菊之丞の初演でした。

なによりも、この名作舞踊を梅之助・梅之丞の勉強発表をしてごゆっくりとご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

「たどり行く、今は心も乱れ候
二上りの有名な出で、詞章、花道から狂気の梶久の登場であります。
指導の尾上菊之丞師は、今回は殊に稽古に心を砕かれた。それ程、「梶久」は尾上流にとつて大切な作品であります。
心乱れた梶久の幻夢の舞踊と、幻影の中の人物としての松山太夫の踊り分けの苦心の舞台が、是も又実に哀愁と華やかさの織り交じる名曲の長唄演奏の中で融然一体となる一ト幕は、皆様を夢幻の世界へといざなうことを信じます。
出演の梅之助は、はじめての立役舞踊、葉月会での努力が梶久で報われたと申しても過言ではないでしょう。
松山太夫を勤める梅之丞は、研修・期生の卒業、稚魚の会ではおなじみで葉月会初出演であります。

河竹黙阿弥 作

切 ら れ お 富 二幕四場

序幕 薩埵峠 一ツ家の場
二幕目 赤間屋店 先の場

同 奥座敷の場
狐ヶ崎畜生塚の場

切られお富 稲積幸十郎
蝙蝠安 台屋三吉
井筒与三郎 按摩めく市
駕籠岩 非人実ハ捕手
同 同 同 同
赤間源左衛門 女郎福山
女房お滝 千鳥
若い者喜助 小蝶
同 太助 同 同
蝶辰藤駒渡吉玉原小坂部
邊田田芳明敏暢
十郎夫車助彦義男宏雪丞門江
郎夫車助彦義男宏雪丞門江

穗積幸十郎
台屋三吉
按摩めく市
非人実ハ捕手
同 同 同
女郎福山
千鳥
小蝶
女中おきん
若い者
同 同 同
高森歌梅千富三権
島須井葉島新
康浩忠秀樹隆也平一
他嘉二行松次助樹隆也平一

解説

元治元年七月、江戸一守田座のために書き
おろされた。この時代は四年後に大政奉還と
いう激動の時代、初演が有名な三世沢村田之助、二〇才の若
女形である。

黙阿弥はあきらかに瀬川如臯作「切られ与三」の書替を自
認し乍ら、しかし独自のお富与三郎として相かわらず、自信
満々の口上を書き残している。

お富の責め場、ゆすり場、殺し場とお膳だてしたあと、幕
末流行の清元の道行を用意するなど、全幕の重量感は、書替
狂言のひと言で片づけられるような作品ではない。それが今
日まで、何十回と再演され続けてきた理由であろう。時間の
制約で、薩埵峠からの上演ではあるが、大喜利の清元淨瑠璃
による「道行」の舞台化が今回の画期的な企画である。

『黙阿弥の』 作者はお富と与三郎を二回めぐり合わして
『お富』 いる。最初が木更津通いの船中で、二度目が
鎌倉藤ヶ谷境内の藤見見物の折にである。

お富は、両国の寄席に上る新内語り、横櫛のお富で評判の
芸人、旅廻りの木更津ではじめて与三郎と浮き寝の契りを交
わした。その後、上州の絹商人と名のる赤間源左衛門の世話

をうけるようになる。

そんなある日、藤の花見の賑わいで、与三郎と再会して血
は燃えたぎり、源左衛門の目隠を忍んでの逢瀬もついに露顕
して、さんざんのなぶり殺しの日にあって川へ捨てられる。

かねて懸想のこうもり安蔵に救われたのが幸か、不幸か、追
手を逃れて安蔵とこの薩埵峠で茶店を張る。夕暮れに、与三
郎が峠を登ってきたのである。

『侍姿の』 三度びのめぐり会いで与三郎が見たお富は、
『与三郎』 きり傷もなまなましい無残な姿であった。

互いに語る三年の年月。今も浪々の身の上で、父井筒与左
衛門が責を負つた御家の宝刀北斗丸の行方を追う与三郎の苦
況を、みるに見かねたお富の心に、ひとつ決心が生まれる。
二百両の金子用立てを、こうもりの安蔵と組んで、遺恨の源
左衛門をゆするのだ。赤間源左衛門こそ、觀音久次といふ
状もちであることを知っているのはお富ひとりであった。慾
に目のくらんだ蝙蝠安が、惚れた女の計略を見抜けず、一人
は連立つて赤間屋へゆすりと出かけてゆく……。

胸のすくお富のタンカをたっぷりとお楽しみ下さい。

藤間勘十郎||振付

大喜利
道行淨瑠璃

穢色於富與三郎

淨瑠璃 清元志佐雄太夫

清元志寿子太夫

清元志貴太夫

清元佳榮太夫

切られお富 歌江
井筒與三郎 勘之丞
三味線 清元志寿朗
上調子 清元美多郎
作曲 清元志寿朗

舞台 本舞台向う流れのある在体の遠見立木の張物、正面舞台前共、卯の花の土手板、楓の立木、日覆より楓の釣枝、総て在体の道具よろしく……。

（花咲きし昨日の春を今日忍ぶ、夏は来れどもまだ寒き片山里

に卯の花の、雪の素足の跡さへも残る卯月の雨あがり……。

花道よりお富、上手より与三郎の出となる。

（年も十九か甘日月、茂る若葉に蔭開き木々の下道ばらばらと、雨の季の落人に掛りし、空のむら雲も、小夜吹く風に吹き散りて、見かわす月の顔と顔、……。

ト、兩人、舞台に来る。

（暁近く山の端に死出へ導く時鳥、それも追手と驚かれ、ト、思入あって合方になり

（ココニ兩人、台詞アリ）

（初めて色に成田から旅を稼ぎの新内節、二節世過ぎに木更津のこはい夜船に寄り添うて、あののものと言つうちに果敢ない別れも佛の加護、また辻堂で二世の縁結びしことは夢にして、色恋捨ててわたしをば、一緒に殺して下さんせと、男の膝に取り縛り、さすが女の愚痴になり、訳も涙にくれにけり。ト、口説きよろしくあって、

（これが町人百姓なら、人の諦りもいとわねど、一合取つて侍が、心中せしと云われては、この身ばかりかお主様、忠義もつくさで人の口、かかる契りが又ほかに永い未来も畜生道、許してくれよ妹と、切なき兄が身の言い訳、理りせめて哀れなり

ト、与三郎よろしく思い入れあって、お富ワッと泣きふす……。

（これがこの世の別れかと、見上ぐる空もうす曇り、鐘の音響く無縁寺の、後世へ導く通夜の声。

（はや明け近き乱れ鶏、後にお富与三郎、後の浮名や残すらん後の浮き名や残すらん。

ト、段切れよろしく幕となる。

清元志寿朗さんは、清元界の重鎮 清元志寿太夫さんの子息で、兄に榮三郎さん、小志寿太夫さん、今回出演の志佐雄さんら清元一家の一員、恵まれた資質と稀な環境の中で成長された邦楽家である。

今回、葉月会のために道行淨瑠璃の作曲を発表して下されたことは、勉強会にとつてこの上ない励みと支えになつた。

「葉月会」上演年表一覧表

第一回	昭和57・8・7日	①演奏「吉野山山中の場」竹本連中 ②演奏「猿舞」長唄囃子連中 ③舞踊「越後獅子」④「船頭」⑤「神田祭」⑥「八段目道行」
第二回	昭和58・8・18日	①演奏「団子売」竹本連中 ②「娘道成寺」長唄囃子連中 ③『どんどろ大師』一幕 ④舞踊「供奴」⑤松羽目物「釣女」 【お弓】歌江・妙林・左升・妙珍・延寿・おつる=宗丸】
第三回	昭和59・8・18日	①演奏「二人禿」竹本連中 ②演奏「勧進帳」長唄囃子連中 ③『朝顔日記』一幕三場—螢狩・宿屋・大井川 ④舞踊「俄獅子」 【深雪】歌江・阿曾次郎・仲助・徳右衛門—幸右衛門】
第四回	昭和60・8・17日	①舞踊「草摺引」②「三人生醉」③「汐汲」 ④『薰樹累物語』一幕=埴生村・絹川堤 【かさね・柳葉】歌江・与右衛門・幸右衛門】
第五回	昭和61・8・19日	①「東海道四谷怪談」一幕四場—浪宅・喜兵衛内・元の浪宅・隠亡堀 【お岩・小平・お花】歌江・伊右衛門・幸右衛門・宅悦=大蔵】 ②舞踊「藤娘」③舞踊「羽衣」
第六回	昭和62・8・7日	①舞踊「浅妻舟」②「夕立」③「鷺娘」 ④『夏姿女房七』三幕—草加屋・鋪床・浜町河岸 【お桜】歌江・二婦・勘之丞・お辰=歌女之丞】
第七回	昭和63・8・10日	①舞踊「操り三番叟」②「狐火」③「お祭り」 ④『花上野誉碑』一幕 【お辻】歌江・源太左衛門・幸右衛門・槌谷内記=松之助】

(注) 第一回のみ小劇場、第二回より大劇場にて公演。

(昭) 和24年6月、三越劇場で「切られお富」が上演された時、監督という肩書で制作に参加された渥美清太郎氏は当時のプログラムに次の二文をのせておられる。

「毒婦物といつた形式は、先づ南北に始まつたと申してもいいでしよう。美しいことこの上なしの目千両といわれた五代目半四郎や、露のたれるような顔の五代目菊之丞に傳法な仕草をやらせるため、三日月おせんとか、土手のお六とかいう役を工夫したため、毒婦といつても役者の愛嬌は決してこわさない、という規則は厳重に守られた時代ですから、ゆすり、かたりをするのでも、自分の慾では決してなく、主人の為か夫の為によんどころなくやるという事に必ずなつていました。その規則は後の如臯や黙阿弥でもやはり踏襲していたので、女形のやつた毒婦に、心から悪人はないのが通例です。それゆえ、ゆすり、殺しまでやつてのけるお富はやがて改心する。渥美氏は続けて書いている。

「大詰には改悟をさせ、与三郎と清元を使つて道行をさせ、遂には自殺までさせてあります。しかし再演以来、そこまでやつたことはありません。いつも、畜生塚で終っています。」

話題

切られお富

二題

反面、好意を獲得する必要のある人に対しては、極めて自然に、

上手に甘つたれることができた。

この頃の大作者として専ら小団次のために多くの名作をものしていた、河竹黙阿弥(当時は新七)に対し、部屋の入口で身をくねらせて、「ねえ師匠、私にも書いてよ」と訴えていた田之助の奇妙に艶っぽい姿を小よしはよく覚えていると云う。

結局、黙阿弥は、元治元年以後、田之助のために、名作「切られお富」以下「孝女お竹」「紅皿欠皿」「笠森おせん」「お静礼

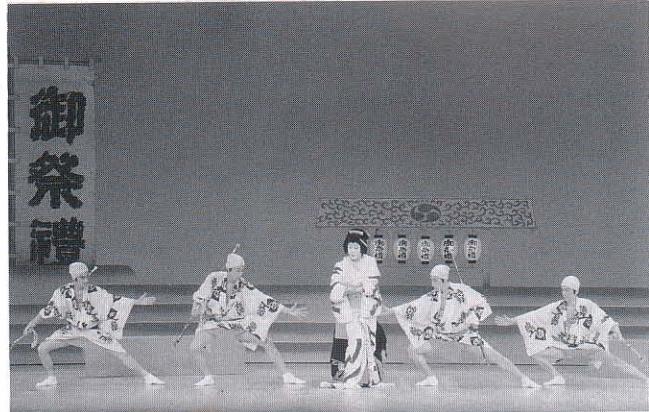
田之助は、美貌と卓抜した演技で人気絶頂のころは、思ひ度30年の才月を経て、はからずも、この清元の道行が上演される。存命されて氏がこの道行をご覧になられたら、どんな劇評をかいていただけたか、今ははるかに届かぬ願いがかけめぐる。

(南) 條範夫氏の最新小説「三世沢村田之助」の中に、「切られお富」初演のエピソードが書かれている。それによると――。

田之助は、美貌と卓抜した演技で人気絶頂のころは、思ひ度30年の才月を経て、はからずも、この清元の道行が上演される。存命されて氏がこの道行をご覧になられたら、どんな劇評をかいていただけたか、今ははるかに届かぬ願いがかけめぐる。

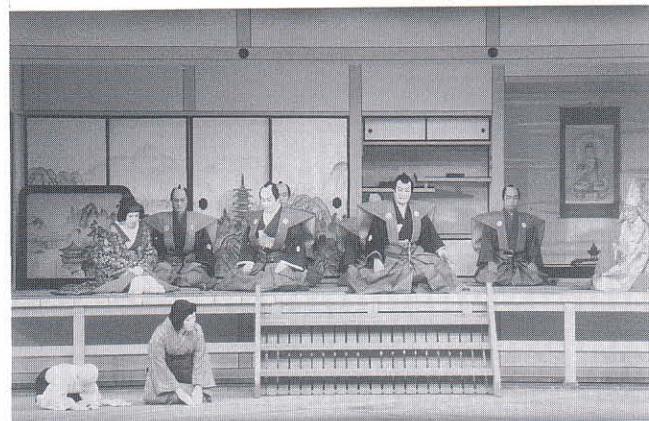
上りの、鼻持ちならない、存在であつたらしい。しかし、その

三 他を書いてやつてある。



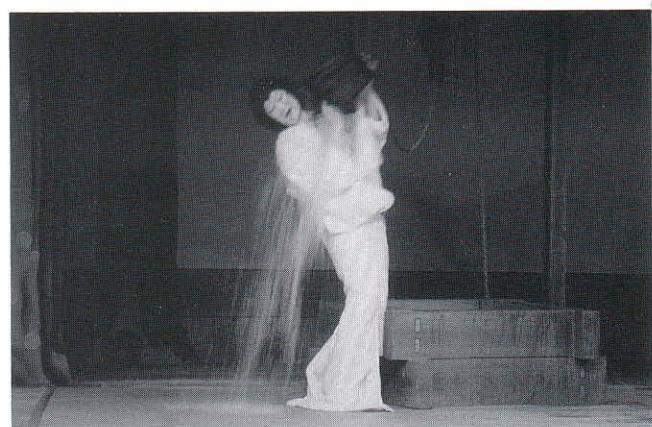
「お祭り」

芸者=歌 江
若い者(右から) 小島孝文・鈴木俊之
神田和幸・小柴俊哉



「志渡寺」

源太左衛門=幸右衛門
樋谷内記=松之助 方丈了然=権 一
同 妻=藤 車 乳母 辻=歌 江
坊 太 郎=関六合



「志渡寺」

乳母 辻=歌 江

63. 8. 10

年に一回、八月に研修
発表をする「葉月会」は、
昨夏の第七回で「志渡寺」
を上演、他に舞踊「操り
三番叟」「狐火」「お祭り」
を発表いたしました。

ご覧の皆様には想い出
のアルバムとして、お越
しになれなかつた皆様の
ために、舞台写真をここ
にお目にかけます。

去年の公演から 第七回 葉月会

想い出の舞台



「操り三番叟」
翁 =幸右衛門
千歳=藤 車



「操り三番叟」
三番叟=辰 夫



「本朝甘四孝・奥庭狐火の場」
八重垣姫=梅 之 助
力 者=玉 雪
力 者=田村俊晴

(撮影 石井雅子)

私の企画室

＝投稿発表＝

口上

昨夏のプログラムに、誌上特別企画を特集して「傑作狂言集」を発表したところ、その中から「牡丹燈籠」が本公演で実現し、待望のファンから大いに喜ばれました。今夏は「切られお富」を上演するに当たり、ご投稿の皆様からの「企画」とお便りを誌上で発表させていただきまます。ご投稿ありがとうございました。

(編集部)

葉月会 上演希望 演目

1. 酒屋
2. 牡丹燈籠
3. 切られお富

(渋谷区 小幡俊介・弘子)

葉月会は第一回から見ています。

希望

「切られお富」

成駒屋さんの系統からは方向が違います
が、源之助の毒婦物又は南北物を見非見た
いです。

(世田谷区 塩川竹造)

「乳母争い」(那須与一西海硯)

是非みたい狂言です。

「乳貰い」(横情雪乳貰)

こんなお芝居もみてみたいです。

「志渡寺」のお辻、しんどい役をよく体を

ころして歌江さんやつていらっしゃいました。

「操り三番叟」辰夫さん京蔵さんの息の合
つた動き、とても楽しめました。

(杉並区 金岩敦子)

さて、貴公演拝見いたしました。(昼ノ部)
各優方の実力と御精神のほどには、感心いたしました。

九期修了生諸君もしっかりした演技でした。

① 鶴飼の勧作

② 乳母争い のいづれか。

舞踊では「大津絵」—屏風から抜け出る

趣向

「お染」

「鞍馬獅子」

(葛飾区 加藤五兵衛)

葉月会第七回公演をたのしく拝見いたしました。歌江さんはじめ、若き研修生の舞

台に歌舞伎の役の心を学んでいただけたらと思います。日本の大切な文化ですので、

切にお願いいたします。お辻のお役に三代目時蔵さんを想い出されます。夏のお芝居として「牡丹燈籠」を見たいです。それと、「伊勢音頭」万野が見たいです。

(川崎市 愛甲真子)

世三間堂棟由来

身替り音頭

黙河弥のもの

紅皿欠皿

加賀駿動

第七回を仲間二十名で楽しく拝見いたし

(与野市 岩田宮二郎)

ました。俳優みなさんが実に熱を入れて演ぜられたのには感銘を受けました。

尚、筋書の中で私が見たいと思いましたのは、「酒屋」のお園、そして「切られお富」が希望です。

他に、「伽羅先代萩」の御殿の場とか「三人吉三」「姫妃のお百」「土手のお六」などが頭に浮かびます。

小生七十才で、歌舞伎は五十年来見てきました。歌江さんはじめ、若き研修生の舞臺に歌舞伎の役の心を学んでいただけたらと思います。日本の大切な文化ですので、

大舞台では最近感じられない出演者一同の熱気と意慾に強く打たれました。

さて、葉月会の誌上企画を全部望みますが、私の希望を並べてみました。

(注、紙面の都合上、葉月会にふさわしい狂言を選びました。ご了承下さい。)

